

中学校社会科授業における 生徒変容と授業者の「信念」形成の実践

学籍番号 199315

氏名 黄瀬 雄也

主指導教員 水野 恵司

1. 本実践課題研究の目的・意義・方法

筆者の問題意識としては、これから求められる授業を考え、その授業を行う上で必要な授業者の視点を獲得しようと大学院進学を決めた。入学時に筆者が抱いていた教育観はあまりにも漠然としたものであり、自らの教育観を明確化する作業を行った。

木原(2004)は授業づくりに関する力量=授業力量を3層構造で描いている。(図1)これは、目に見えない「信念」を中核とし、行為によって確認しうる「技術」を表層に位置づけ、そして両者を「知識」が仲介するという構造を表すものである。

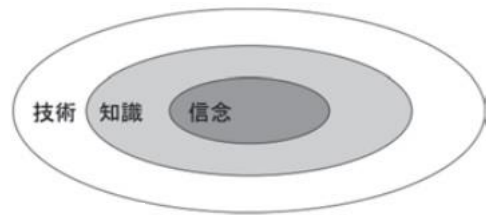


図1 授業力量の三層モデル

筆者の教育観としては、授業者は授業に対して「生徒につけたい力を育成する」というねらいを授業に込め、それを「願い」として持ち、授業前と授業後で生徒の行動が変容したことで、教えたとみなす「成功的授業観」の立場にあると自任した。そこで、筆者の教育観から授業実践を捉える視点のモデルを考えた。(表1)

このモデルの中で、A-①に該当する部分を筆者は「信念」がある状態と定義し、そのような授業を目指すための方略を実習の中で授業見学や授業実践を通して模索した。

研究目的としては、実習校の課題に合わせ授業観察で見えてきた課題や現場の要請を受けて各実習の課題解決を目指した。

	A: 成功的教育観 (生徒中心)	B: 意図的教育観 (教師中心)
①授業者の「願い」がある	A-①	B-①
②授業者の「願い」がない	A-②	B-②

表1 授業者の教育観分類表 筆者作成

2. 常勤講師が自らの教育観を変容させるための手立て

M1時の実習校は市内でも一番の小規模校であり、学力の低い生徒に対する手立てが課題であった。上記の表1で分類するとB―①に属していると考えられた常勤講師の授業を見学し、生徒の実態を把握するとともに、筆者自らが授業実践者となり、授業を行った。結果的に生徒が授業に参加するようになり、その生徒の変容を目の当たりにした常勤講師もA―①を目指そうとする動きを見取ることができた。

3. 授業づくり経験のない非常勤講師の授業分析

M2時前半の実習では、授業経験は昨年の教育実習のみしかない非常勤講師が分析対象となった。実習校の要望で、授業経験のない非常勤講師の支援を頼まれ、その授業観察を行った。初任期の授業者が陥りやすい授業場面を取り出し、その場面のどのような点が課題であるのかを、筆者が分析し、非常勤講師に伝え、授業改善を促す実習となった。

表1の分類表では、非常勤講師はB―②の属していると分析した筆者は、まずはB―①になるように授業者として非常勤講師が授業に「願い」を込められるように支援をする必要があると考えた。

4. 授業づくりを通じた教育観構築の支援

M2時後半の実習では、実習校の教員の事情により、M2前半で支援していた非常勤講師が3学期には常勤講師となり、独力で授業づくりをしなければならない事態が起こっていた。そこで、今まで授業づくりを経験したことがない非常勤講師に対して、授業づくりの支援を行い、授業者としての「願い」を持ち、成功的教育観を目指していく過程をインタビュー調査として記録した。授業を全く作ることがない非常勤講師に対して、授業実践を行う箇所を決め、約3週間をかけて一つの授業を作り上げた。授業前から授業実施、そして授業後までの過程をインタビューすることで、非常勤講師の教育観の変容を見取り、分析することを目的とした。

5. 本実践課題研究のふりかえり

2年間の実習を通して、入学前は漠然としていた筆者の教育観が、明確になったことが一つの大きな成果だと考える。現場では、「なぜ授業をするのか?」「そもそも教えるとはどういう状態なのか?」「その教科を学ぶ意味とは?」など考える時間もなく忙殺されていく。現職が休職してまで、大学院に進学し、自らを研鑽する大きな理由は、今後「学び続ける力」を子どもたちに育まなければならない教員自身が、学び続ける必要があると考えるからである。この2年間での授業見学及び授業実践、そして授業分析の記録が、授業経験の浅い教員の一支援となり、若手教員が増えていく学校現場に還元されることを切願う。